

法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

**平成26年度～平成30年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」
研究成果報告書概要**

1 学校法人名 学校法人 武蔵野美術大学 2 大学名 武蔵野美術大学

3 研究組織名 武蔵野美術大学 造形研究センター

4 プロジェクト所在地 東京都小平市小川町 1-736

5 研究プロジェクト名 日本近世における文字印刷文化の総合的研究

6 研究観点 研究拠点を形成する研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
新島 実	造形学部視覚伝達デザイン学科	教授

8 プロジェクト参加研究者数 18 名

9 該当審査区分 理工・情報 生物・医歯 人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
新島実	視覚伝達デザイン学科・教授	文字形象、造本・装訂デザインの解析および国際比較文化史的研究	デザイン学的視点からの日本近世の木版印刷資料の解析、国際比較研究。高速類似画像検索システムの推進
寺山祐策	視覚伝達デザイン学科・教授	文字形象、造本・装訂デザインの解析、高速類似画像検索技術の活用による研究	デザイン学的視点からの日本近世の木版印刷資料の解析。高速類似画像検索システムの推進
内田あぐり	日本画学科・教授	日本画を専門とする視点からの造本・装訂デザインの研究、写本との比較研究	日本近世木版印刷物における造本・装訂デザインの解析
高浜利也	油絵学科・教授	版画制作を専門とする視点からの印刷技法および版と表現技法の研究、写本との比較研究	日本近世木版印刷物における造本・装訂デザインの解析
長澤忠徳	デザイン情報学科・教授	アジアのグラフィズムの視点からの文字形象、造本・装訂デザインの国際比較研究	アジアにおける文字形象、造本・装訂デザインの国際比較研究
玉蟲敏子	造形文化・美学美術史・教授	日本近世美術史研究者の視点からの近世の造本・装訂デザインの研究、写本との比較研究	美術史的観点からの日本近世印刷資料の文字形象、造本・装訂デザインの解析
今岡謙太郎	教養文化・教授	日本近世文学研究の視点からの研究対象資料の価値評価と文学史上の位置づけ	文字形象、造本・装訂デザイン研究の対象となる資料の文学史的価値判断

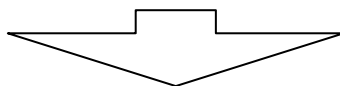
法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

勝井三雄	名誉教授	文字形象、造本・装訂デザインの解析および国際比較文化史的研究	デザイン学的視点からの日本近世の木版印刷資料の解析、国際比較研究
荒俣宏	客員教授	博物学的視点からの造本・装訂デザインの包括的研究	博物学的視点からの図像解析、造本・装訂デザインの解析
本庄美千代	視覚伝達デザイン学科・非常勤講師		日本近世の図像、文字形象および造本・装訂デザインの研究
(共同研究機関等)			
杉浦康平	神戸芸術工科大学・名誉教授	アジアのグラフィズムの視点からの文字形象、造本・装訂デザインの国際比較研究	アジアにおける文字形象、造本・装訂デザインの国際比較研究
石川英輔	作家	江戸文化の文脈における書物、活字、造本の研究	日本近世木版印刷資料の江戸文化史的位置づけ
片塩二郎	株式会社朗文堂代表取締役	文字形象および印刷技法の研究	日本近世の古活字の印刷技法史上の位置づけ
神作研一	人間文化研究機構国立文学研究資料館研究部・教授	日本近世文学研究者の視点からの研究対象資料の価値評価と文学史上の位置づけ	文字形象、造本・装訂デザイン研究の対象となる資料の文学史的価値判断
タイモン・スクリーチ	ロンドン大学アジア・アフリカ研究所・教授	江戸文化の文脈における書物、活字、造本の研究	日本近世木版印刷資料の江戸文化史的位置づけ
アン・サンスー	タイポグラファー、PATI ファウンダー、元弘益大学視覚デザイン科・教授	韓国文化の視点からの文字形象、造本・装訂デザインの国際比較研究	アジアにおける文字形象、造本・装訂デザインの国際比較研究
ワン・ミン	アート・ディレクター、デザイナー、中央美術学院・教授	中国文化の視点からの文字形象、造本・装訂デザインの国際比較研究	アジアにおける文字形象、造本・装訂デザインの国際比較研究
マ・クアン	清華大学美術学院・教授	中国文化の視点からの文字形象、造本・装訂デザインの国際比較研究	アジアにおける文字形象、造本・装訂デザインの国際比較研究

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
(客員研究員の追加)			



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
清華大学美術学院(中国 北京)	造形研究センター客員研究員	マ・クアン	アジアにおける文字形象、造本・装訂デザインの国際比較研究

法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

(変更の時期:平成27年9月1日)

新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
武蔵野美術大学 美術館・図書館	武蔵野美術大学非常勤講師、造形研究センター客員研究員	本庄美千代	日本近世の図像、文字形象および造本・装訂デザインの研究

(変更の時期:平成29年4月1日)

11 研究の概要(※ 項目全体を10枚以内で作成)

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

【目的・意義】

本研究プロジェクトの目的と意義は、次のとおりである。

① 日本近世の木版印刷資料の造形学的分析

木活字本や整版本など近世日本において発展をとげた木版印刷資料をタイポグラフィデザインおよび造本・装訂デザインの視点から分析し、それらの資料の造形的特質を明らかにする。

② 高速類似画像検索技術を用いたタイポグラフィデザインの解析

タイポグラフィの分類にあたっては、高速類似画像検索技術を用いた文字形象および形態解析を行う。

③ 国際比較研究

日本近世におけるタイポグラフィ(文字形象)デザインを、日本一国の印刷文化史のなかでのみ捉えるのではなく、中国や韓国という他の漢字文化圏における木版印刷資料と比較考察することによって、それらの間の類似点や差異を分析し、それぞれの国における特質を明らかにすることができる。

④ 文字印刷文化の総合的研究

グラフィックデザインの専門家のみならず、日本近世美術史、日本近世文学、日本画、版画を専門とする研究者による共同研究により、学際的かつ総合的な造形的特質を明らかにすることができる。

近世日本における木版印刷資料は、デザイン学の観点からはこれまであまり研究されてこなかった。これらの資料をデザイン学の視点から整理、分析することにより、日本における印刷文化および造形文化の展開の歴史への知見をさらに深め、新たな研究の領域を広げることが可能となる。また、漢字の図像的視点および文字形象の国際比較文化史的考察により、日本におけるタイポグラフィデザインの造形的歴史を多角的に捉えることが可能となり、文字文化の将来的発展にも寄与することとなる。

(2) 研究組織

本研究プロジェクトは、グラフィックデザインを専門とする教員と、近世絵画史を専門とする教員、日本画を専門とする教員などを中心に研究体制を構築し、アジアや近世の出版文化に詳しい専門家、日本近世文学を専門とする研究者を学外から客員研究員として迎え、本学造形学部専任教員および名誉教授の9名、学外の客員研究員9名の計18名を担当研究者として配置している。さらにリサーチフェロー制度を活用して若手研究者2名、資料の整理およびデジタル化作業に大学院生や卒業生が参加している。

また本プロジェクトでは、日本近世当時の古活字版の成立過程を復元し、具体的に検証する実践研究を進めるため、京都の伝統的な摺師、彫師、経師の職人の方々の協力を得ている。

研究は「造形研究センター運営委員会」と「美術館・図書館」によって組織的に支援される体制である。

法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

(3) 研究施設・設備等

研究施設・造形研究センター(面積 3,970 m²)を 18 名の研究者が利用。

平成 26 年度に古活字版嵯峨本『伊勢物語』(利用時間 2032 時間)、「草双紙を中心とする近世絵入本コレクション」(利用時間 9682 時間)、「近世活字印刷資料コレクション」(利用時間 2632 時間)、平成 27 年度に整版丹緑本『曾我物語』(利用時間 4320 時間)、写本『千蟲譜』(利用時間 1440 時間)、平成 28 年度に写本『衆蟲写真譜』(利用時間 1296 時間)を整備した。美術館・図書館が所蔵する 17 世紀から 19 世紀までの近世日本の古典籍および活版印刷資料と合わせて研究を実施している。

(4) 研究成果の概要 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び*を付すこと。

① 日本近世の木版印刷資料の造形学的分析

平成26年度

本学美術館・図書館で所蔵する貴重書や金原服部文庫の古典籍を対象に、本研究プロジェクトが研究対象とする木版印刷資料全体の整理と評価を進め、今後の研究計画を策定した。貴重書の中から嵯峨本『伊勢物語』や「光悦謡本」などを主たる対象として研究を進める方針を決定した。手始めに、嵯峨本に特有の贅を尽くした造本への着目から、木版印刷や唐紙、製本等を手がける京都の工房を訪問し、今日に伝わる伝統的な木版印刷技術について研究調査を行なった。

平成27年度

前年度の学内資料の整理と評価に基づいて研究対象を精査し、慶長・元和期に刊行された嵯峨本と古活字版全般を研究対象として調査を始めた。その過程で、造形学的見地から嵯峨本研究を行う方針を立て、「嵯峨本謡本復元プロジェクト」を立ち上げた。本プロジェクトは、嵯峨本の中でも高い美術的価値を持つとされる所謂「光悦謡本」(本研究では以後「嵯峨本謡本」とする)の再制作(復元)を通して、日本近世の木版印刷資料の技術的・造形的水準を検証することを目的としている。復元は京都の職人の技術を用いて進め、木活字、装飾料紙、摺刷盤、製本等、造本にまつわるすべての工程を対象とする。復元に先立ち、京都の伝統的唐紙制作工房や木版印刷工房などを訪ね、専門の職人と具体的な当初計画を策定した。また、木活字の原字を制作するために、光悦流書風の写本と「嵯峨本謡本」についての調査を進め、京都の光悦寺や東京藝術大学、野上記念法政大学能楽研究所等、複数の機関で研究調査を行なった。また、嵯峨本謡本の木活字を復元する際の参考とするために、京都府立総合資料館を訪ね、伏見版木活字の高さや精度について調査・検証を行なった。

平成28年度

「嵯峨本謡本復元プロジェクト」が本格化し、光悦寺が所蔵する光悦流書風の未装本写本を原字として木活字を制作することに決定し、写本の高解像度のデジタルスキャンを行った。また、同種の未装本写本について調査を継続し、京都国立博物館などの所蔵機関にて研究調査を行なうとともに、同種の未装本写本三点を研究資料として入手した。また、研究員が制作した原字をもとに、職人による木活字制作にも着手し、活字を固定して摺るための摺刷盤の試作品を制作した。和紙の復元にあたっては、「嵯峨本謡本」の料紙の紙繊維分析を行ない、和紙の抄造方法と料紙制作プロセスの解明のための調査を進めた。表紙や本文の雲母摺については、版木の試作品を制作し、唐紙職人と技術面の検証を進めた。

また、この年より「和語表記による和様刊本の源流」を研究テーマに掲げ、漢字仮名交じり文の刊本の源流を辿り、それらを日本の造本史のなかに位置付けていくことを目指した。「和語表記」には、漢字平仮名交じり文と漢字片仮名交じり文の二つの流れが存在し、「和様刊本」とは、本文に匡郭および界線を持たな

法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

い版面の書物を指す。基本的に、これら二点の特徴を備えた刊本を対象に、以下の四本の柱を軸として研究を進めた。

1. 浄土真宗並びに浄土教の版本 2. 「嵯峨本謡本」 3. 古活字版・木版整版 4. 『古文眞寶』

浄土真宗の版本と浄土教版については、漢字片仮名混じり文と漢字平仮名混じり文の源流を辿る研究を進めた。その過程で、最古の漢字平仮名交じり文の刊本である浄土教版の『黒谷上人語燈録』(1321年)を龍谷大学図書館にて調査することができた。漢字片仮名交じり文においては、最も早い例として『夢中間答集』(1342年)が国立国会図書館に所蔵されているが、造本様式は匡郭と界線を残す「唐様」である。表記のみならず造本様式の面でも「和様」を実現した最初期の刊本が、浄土真宗の文明版『三帖和讃』(1473年)である。浄土真宗の版本として重要なものは、ほかに文明版の版木を元にして、色紙に摺られた天文版『三帖色紙和讃』があり、この二冊を主たる研究対象として調査を進めた。

古活字版・木版整版の書物については、所蔵資料を中心にその版面構成と字形の分析を行なった。『花伝書』に見られる繊細な人物表現や、『群書類従』の機織りの図に見られる精緻な版刻の技術进行分析し、「表現」と「技術」の両面から木版印刷の持つ可能性を捉える調査を進めた。

『古文眞寶』は表記の面から見れば漢文であり、和語表記を伴わないが、日本語の構成要素の一部としての漢字字形(主に明朝体)の変遷を辿るために研究を始めた。この書物は、五山版の時代から明治初期に到るまで、ほぼ同一の内容でありながら様々な形で刊行されており、明朝体をはじめとする字形の種類や変遷を辿るための有用な資料として調査を行なうこととした。

平成29年度

前年度に研究テーマとして掲げた「和語表記による和様刊本の源流」を辿る調査を継続。浄土真宗の版本は『三帖和讃』を中心に研究を進め、日本民藝館と城端別院善徳寺にて訪問調査と写真撮影を実施した。撮影においては可能な限り全帖を撮影し、デジタル画像に基づいた字形の比較研究に利用した。また、浄土宗の版本に関連して、漢字平仮名交じり文の刊本の系譜を辿る過程で、『黒谷上人語燈録』の後に続く浄土教版『三部仮名鈔』(1419年)の調査を進めたが、同書は一度『弘文荘古版本目録』に掲載された後に所在不明となっており、引き続き調査を行なうこととなった。

「嵯峨本謡本復元プロジェクト」は、研究員による「嵯峨本謡本」の活字分類と、写本を原字とする木活字版下の制作が完了した。また、木活字については全ての活字の彫刻を終え、彫りの精度のさらなる向上と摺刷盤の改良を進めた。料紙の復元にあたっては、専門家による紙繊維分析と職人による調査の結果を受けて、従来有力な説とされていた糊による「貼り合わせ」ではなく、「合わせ漉き」の方法により越前で紙漉きを行なった。

「古活字版・木版整版」の書物については、館蔵資料を中心に整理を進め、伝嵯峨本『源氏物語』や『伊曾保物語』、『花伝書』等の古活字版や、龍谷大学図書館の所蔵する寛永版『塵劫記』を中心に、文字組版並びに版面構成と挿絵の関係を軸に分析を進めた。

『古文眞寶』は、匡郭と界線を持つ「唐様」の造本様式であるが、わが国における明朝体の歴史を考えるうえで重要な意義を有している。本年度から国文学研究資料館の所蔵する約600冊のコレクションの撮影を始め、撮影した画像およびデータの整理と、時代、書体、判型等による比較・分類作業に着手した。また、国文学研究資料館と合同で「古文眞寶特別研究会」を開催し、国文学とデザイン・造形学の双方の領域から『古文眞寶』の持つ意義について議論を深めた。

平成30年度

30年度は本研究プロジェクトの完成年度として、展覧会「和語表記による和様刊本の源流」と同展図録

法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

において詳細な研究成果が発表された。よって、ここにはその概略のみ報告する。

※詳細は展覧会図録「和語表記による和様刊本の源流」または「様式 3」の 4 番「展覧会図録の開発」の冒頭 PDF 書類三種を参照。

浄土真宗の版本の研究では、『三帖和讃』を研究の中心に据え、石川県金沢市の本泉寺の文明版を実見することができた。また、本泉寺本の本文をもとにして城端別院善徳寺の天文版『三帖色紙和讃』の復元に取り組み、本文と料紙装飾の双方の復元作業を行なった。

「嵯峨本謡本復元プロジェクト」においては、具引きと雲母摺りの調整を行い、全帖分の料紙を制作を終えた。また、ゴマ譜の活字を完成させ、摺刷に必要なすべての木活字と道具類が完成した。木活字をはじめとする道具類の制作と、摺刷実験の過程で得られた造形学的知見については、本研究プロジェクトの成果発表にあたる展覧会「和語表記による和様刊本の源流」の会場と、同展の図録に詳細な研究成果が発表された。なお、嵯峨本謡本『三井寺』(特製本・上製本)の復元は、本年度中を目処に複数部数を復元し、本学美術館・図書館にて展示する予定である。

「古活字版・木版整版」については、古活字版と同時期の西洋の書物との比較を行なった。古活字版の中には、簡潔なシステムによりながらも組版上さまざまな工夫が施され、西洋の書物に勝るとも劣らない造形性を有する刊本も存在する。『花伝書』には、欧文組版における「ハンギング」と同様の形式が見られ、挿絵と本文の版面構成も優れている。整版本の寛永版『塵劫記』では、ページをまたいだ大胆な図版の構成と、ダイヤグラムの嚆矢と見られる表現が見られるなど、今後さらなる研究を進めるための端緒をつかむことができた。

『古文眞寶』の研究では、時代、書体、判型等による比較・分類作業をさらに進め、「古文眞寶字形分類年表」を展覧会にて発表した。また、展覧会に合わせて『古文眞寶』のパネルを制作し、それぞれの字形が持つ特徴をデジタル画像上で拡大・抽出することにより、字形の持つ力を直接的に伝えることができた。

本研究の成果

浄土真宗および浄土教版の研究(*①)

城端別院善徳寺所蔵 天文版『三帖色紙和讃』全帖デジタル化
 日本民藝館所蔵 文明版『三帖和讃のうち高僧和讃』天文版『三帖色紙和讃 正信念仏偈』
 教如版『正信偈並三帖和讃』良如版『正信偈並三帖和讃』全帖デジタル化
 本泉寺(金沢市)所蔵『三帖和讃並正信念仏偈』、全帖デジタル化
 本誓寺(白山市)所蔵『三帖和讃並正信念仏偈』、一部をデジタル化
 城端別院善徳寺蔵 天文版『三帖色紙和讃』(部分)復元、2部(進行中)
 『三帖和讃』および「御文(御文章)」各種字形比較研究

嵯峨本謡本復元プロジェクト(*①)

嵯峨本謡本『三井寺』(上製本、特製本)と未装本『三井寺』(光悦寺)の比較研究
 嵯峨本謡本の表紙および料紙の成分分析と製本の構造研究
 嵯峨本謡本『三井寺』(上製本)の全活字調査分類
 復元本『三井寺』の全原字(活字版下)制作(2698字)
 復元本『三井寺』の木活字ゴマ譜制作(約2400字)
 復元本『三井寺』の料紙制作(抄紙、具引き、雲母摺)
 復元本『三井寺』の表紙雲母摺用版下および板木制作(2種)
 復元本『三井寺』の印刷に使用する摺刷盤の研究、制作
 復元本『三井寺』の特製本、上製本(複数部数を予定)の制作(進行中)

古活字版・木版整版の研究(*①)

古活字版と西洋の書物の組版を比較してその特徴を抽出
 古活字版の紙面構成の特徴とそのシステムの分析
 整版本の紙面構成と挿絵表現の分析

法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

古文眞寶の研究(*①)

国文学研究資料館蔵(林望氏旧蔵)『古文眞寶』約 600 冊の撮影、デジタル化
「古文眞寶字形分類年表」並びにパネル制作(展覧会会場版)

展覧会図録の開発:近世日本における刊本のデジタル化と印刷表現の研究(*②)

本研究では、現物資料と複製図版の落差を解消するために、使用するすべての資料について原寸大の複製を目指した。そのために、凸版印刷株式会社の協力を得て、研究の一環として展覧会図録の開発に取り組んだ。本研究の成果の概要は以下の通りである。

「和語表記による和様刊本の源流」展出品作品の一部を高精細デジタル化(原寸)

古典籍における再現性の高い印刷を実現させるためのプロセス資料(撮影機材、用紙、インキ等の決定プロセス資料)

『和語表記による和様刊本の源流』展図録(図版篇)、1,000 部

『和語表記による和様刊本の源流』展図録(論考篇)、1,000 部

②「高速類似画像検索技術を用いたタイポグラフィデザインの解析」

平成26年度

初年度は本学美術館・図書館の所蔵する貴重書と金原服部文庫の古典籍を対象に、資料価値の評価と整理を進めた上で研究対象資料のデジタル化に着手した。本システムの開発目的を、近世の版本の文字解読補助機能と文字形象の研究とし、高速類似画像検索技術「EnraEnra」を用いて新たに開発するシステムの基本的な仕様について検討を重ねた。また、研究を進めるにあたり必要となる事前準備作業を以下の a から d に掲げた項目に整理し、作業に必要な時間及び経費等の調整を行った。

a. システムの検索項目等の検討及び開発。 b. 研究対象資料のデジタル化の方法と書誌情報の登録内容の検討。 c. システム上における文字データの切りだしと登録、読み仮名の付与等の作業を行うためのインターフェースの開発。 d. 近世版本の文字の解析補助と、文字形象の比較研究のために類似画像検索機能の精度を向上させるための、「古典籍の文字データベース」(字書)の充実。

平成27年度

研究対象資料のデジタル化を継続。また、日立製作所の研究者や技術者とも相談しながら、本システムが実現する機能の具体的な検討を始めた。高速類似画像検索技術「EnraEnra」を応用して、専門的知識がなければ読むことの難しい連綿体やくずし字等の解読を補助する機能や、文字形象の比較研究を行うための機能を盛り込んだ新たなシステムの開発と仕様の検討を開始した。10月よりシステムのプロジェクト内での運用を始め、研究対象資料のシステムへの画像登録と登録された画像の「文字切り出し」に着手した。

なお、本システム構築のために行っている作業手順は以下の通りである。

1. 研究対象資料のデジタル化 2. デジタル化画像および書誌情報のシステムへの登録 3. システム上での「文字切り出し」 4. 文字画像への読み仮名の付与 5. 文字画像の登録

平成28年度

研究対象資料のデジタル化を継続。システムのプロジェクト内での運用を継続し、「文字切り出し」を継続・推進。システムの基本仕様の開発を終えた。26年度に本研究の事前準備として策定した a から d の作業のうち、28年度末時点において、a から c までを完了した。また、d の充実を図り、本研究の主眼である日本近世における文字形象の研究に取り組んだ。なお、28年度末時点でシステムに組み込まれた機能は以下の通りである。

・任意の文字形象を類似性に基づき比較研究するための「古典籍の類似字形検索機能」

法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

・仮名あるいは漢字の特定字種の検索機能

・版形式(写本、古活字版、整版、近世木活字版)や出版年による絞り込み機能

上記三点の条件を組み合わせることにより、これまで構築に努めてきた「古典籍の文字データベース」(字書)から、目的に応じて的確な絞り込み検索が可能となり、システム利用者の研究目的に適った類似画像の抽出と分類が可能となった。これにより、任意の文字データに対する類似画像の検索効率が格段に向上し、近世の刊本の研究を進めるための基礎的な条件を整えることができた。

平成29年度

研究対象資料のデジタル化を継続。システムのプロジェクト内での運用を継続し、「文字切り出し」を継続・推進。システムの最終公開用画面の開発を終えた。26年度に本研究の事前準備として策定した a から d の作業のうち、29年度末にはすべての開発を完了した。

また、a から d までの準備が整ったことを受けて、29年度末までに、新たに「古典籍の文字解析補助機能」をシステムに組み込んだ。これにより、本研究が目指していた「古典籍の類似字形検索機能」と、「古典籍の文字解析補助機能」のすべてが実装された。限定的な公開ではあるが、学内向けの公開画面が完成した。

平成30年度

29年度に実装された「古典籍の文字解析補助機能」により、任意の古典籍の画像を矩形で区切ると、システムに登録された文字矩形画像との類似性に基づき文字の推定が可能となった。システムの基本的な機能の開発は完了したが、文字解析機能の精度を高めるためには、より多くの矩形化された文字データの登録が必要となる。継続して所蔵資料の登録作業に取り組むとともに、人文学オープンデータ共同利用センターによる「日本古古典籍データセット」並びに「日本古典籍くずし字データセット」を利用して字書の充実を図った。30年度末時点でデジタル化が完了した本学所蔵資料の総数は、画像点数 6,429 点、「文字切り出し」による文字矩形画像点数は 216,162 点である。また、人文学オープンデータ共同利用センターにより提供された画像の登録点数は 181 点、切り出された文字矩形画像点数は 44,832 点である。

今後、人文学オープンデータ共同利用センターにより提供される画像登録を促進し、字書の充実を図ることにより、「古典籍の文字解析補助機能」のさらなる精度向上が見込まれる。また、「古典籍の類似字形検索機能」により、文字形象を類似性に基づいて抽出することが可能となり、近世日本の刊本の膨大な数の文字形象を対象とした研究の進展が見込まれる。本研究は所蔵資料のデジタル化とシステムの構築に多くの時間を割いてきたが、これにより、近世日本の版本の文字形象に関する研究を飛躍的に発展させるための基盤が形成された。

本研究の成果

日立製作所製高速類似画像検索システム「EnraEnra」を用いた新たなシステムの開発が完了(*①)

当館所蔵古典籍資料(貴重書および金原服部文庫資料)のデジタル化とシステムへの登録
(画像点数:6,429 点)

当館所蔵古典籍デジタルデータより文字矩形データを切り出し(デジタル文字矩形数:216,162 点)

人文学オープンデータ共同利用センターが提供するオープンデータから古典籍資料デジタル化データ 181 点をシステムへ登録

国文学研究資料館オープンデータから文字矩形画像、44,832 点をシステムへ登録

「古典籍の類似字形検索機能」を開発、実装

「古典籍の文字解析補助機能」を開発、実装

③ 「国際比較研究」

法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

平成26年度

本学の研究員が本研究プロジェクトへの協力を要請するために、中国、韓国を訪問した。中国では北京中央美術学院や清華大学美術学院など、本研究プロジェクトの客員研究員や研究協力者の所属する大学において、近代活字印刷物の調査並びに意見交換を行なったほか、伝統的な木版整版による書物制作工房や現代のタイプフェイス・デザインの現場を調査した。韓国では慶北大学を中心に、客員研究員や研究協力者を交えて、同大学が所蔵する古典籍や印刷関連資料を調査しながら意見交換を行った。日中韓三カ国における印刷文化の相違や影響関係などの基礎的調査を行なうとともに、日中韓三カ国の国際研究者ネットワークの構築に努めた。

平成27年度

中国韓国から客員研究員と研究協力者を招聘して、「漢字文化圏タイポグラフィの変遷 日中韓共同研究」と題したシンポジウムを開催し、中国、韓国の印刷史や造本史について講演や討議を行った。(*③) また、日本を中心として、中国、韓国との印刷・造本にまつわる影響関係を俯瞰することのできる「日中韓三カ国 印刷史・造本史年表」を制作し、今後の研究の方向性について三カ国で意見を交換した。

平成28年度

京都において「日中韓共同研究会」を開催し、「嵯峨本謡本復元プロジェクト」の進捗状況や『三帖和讃』の研究、高速類似画像検索技術「EnraEnra」を用いたシステムの開発状況等について報告を行い、中国、韓国の研究員や研究協力者と研究進捗の共有を図った。(*④) また、中国、韓国の研究員らと共に「嵯峨本謡本復元プロジェクト」で復元を依頼している経師、木版師、唐紙師の工房を訪問し、日本の伝統的な職人の技術について研究調査を行なった。

平成29年度

これまでの共同研究の成果を活かし、平成27年度に制作した「日中韓三カ国 印刷史・造本史年表」を発展させた年表の制作に着手した。編集にあたっては、①「日本近世の木版印刷資料の造形学的分析」により得られた成果を軸に、「和語表記による和様刊本の源流」を日本の造本史に位置付ける意図のもと、「嵯峨本」や『三帖和讃』を中心とする年表へと再編した。年表制作のために、わが国の印刷史、造本史上重要な意義を持つ書物の調査・研究を進めるとともに、並行して、中国、韓国、そして西洋との影響関係の整理を進めた。

平成30年度

本研究プロジェクトの活動成果を報告する展覧会「和語表記による和様刊本の源流」にて、中国、韓国の研究員、研究協力者らを招き講演会を開催した。(*⑤) 中国から蔣華氏(中央美術学院副教授)、韓国から南権熙氏(慶北大学校社会科学大学教授)と朴志勲氏(朴志勲デザイン事務所代表)を迎え、今回の研究プロジェクトの成果報告がなされた。日中韓三ヶ国の印刷、造本文化を5年間にわたり比較研究する過程で、双方の共通点あるいは相違点について認識が深まり、結果としてそれが自国の印刷文化の特質を理解する助けとなった。「和語表記による和様刊本の源流」という研究テーマの設定と、そのなかで行なわれた造形学的研究にも、こうした国際比較研究の成果が反映された。

本研究の成果

- * 「和語表記による和様刊本の源流」関連年表制作(展覧会会場にて発表) (*①)
- * 『和語表記による和様刊本の源流』(論考篇) (*②)

法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

④ 「文字印刷文化の総合的研究」

平成26年度

文字印刷文化全般について学際的かつ総合的な研究を可能とするために、以下の研究会及び講習会を開催した。高速類似画像検索技術「EnraEnra」を応用した新たなシステムを開発するにあたり、日立中央研究所の廣池敦氏を招いて研究会を開催した。(*⑥)同技術の特徴について廣池氏より説明を受け、今後技術面での助言を受けることになった。近世における刊本の製本研究に関連して、京都の経師として製本や文化財修復等を手がけている(株)大入の大入達男氏を招き、「和装本講習会」を開催した。(*⑦)和本の代表的な製本様式である四つ目綴じの方法について職人から手ほどきを受けた。また、客員研究員の石川英輔氏による講演会「『江戸期草双紙』を中心とした変体仮名および印刷文化について」を開催し(*⑧)、文字の解読には専門的知識が必要な草双紙について知見を深めた。

平成27年度

高速類似画像検索技術「EnraEnra」を応用して新たに開発を進めているシステムの参考とするために、東京大学史料編纂所の井上聡氏を招いて同編纂所と奈良文化財研究所が共同で運用している「電子くずし字データベース」についてヒアリングを行なった。(*⑨)また、凸版印刷と国文学研究資料館が開発しているくずし字翻刻のための OCR 技術について調査するために、「日本語の歴史的典籍データベースが切り拓く研究の未来」、「可能性としての日本古典籍」などのシンポジウムに出席し、本研究プロジェクトで進めているシステム開発との類似点・相違点を検証した。研究会では、客員研究員の神作研一氏を招き「本にも身分がある—古典籍のカタチ—」を開催し(*⑩)、近世日本の出版文化とその背景にある需要層の広がり等についてご講演いただいた。

また、「嵯峨本謡本復元プロジェクト」に関連して、野上記念法政大学能楽研究所にて「嵯峨本謡本」や観世流謡本の写本などの研究調査を行なった。同大学にて開催された研究集会「縦断横断 光悦謡本—慶長文化の精華を解析する—」に出席したほか、同時開催の展示「慶長文化の精華 光悦謡本の世界」を展覧し、慶長期の「嵯峨本謡本」並びにそれと関連する写本等について知見を深めた。

平成28年度

「嵯峨本謡本復元プロジェクト」の進展とともに、野上記念法政大学能楽研究所で研究調査を継続したほか、能楽史の専門家とも連携を深め、同研究所の宮本圭造教授を招き、研究会「本阿弥光悦と謡曲 光悦流の筆写本と嵯峨本謡本の関連について」を開催した(*⑪)。ほかに、東京藝術大学が所蔵する通称「百番本」と呼ばれる謡本写本や、京都の光悦寺にて未装本写本を調査し、「嵯峨本謡本」と写本の関係について研究調査を進めた。

平成 29 年度

『古文眞寶』の研究に関連して、国文学研究資料館において「武蔵野美術大学・国文学研究資料館合同研究会」を開催した(*⑫)。林望氏や神作研一教授ら、国文学の専門家と議論を交わすことを通して、『古文眞寶』の文化史的、出版史的意義を確認した。また、本研究プロジェクトが進めている『古文眞寶』の字形研究に協力を要請し、国文学研究資料館の所蔵する『古文眞寶』約 600 冊の撮影を行なった。

平成 30 年度

本学美術館・図書館にて開催された展覧会「和語表記による和様刊本の源流」に関連して、以下の連続講演会を開催し、本研究プロジェクトの五年間にわたる成果が発表された(*⑤)。

法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

*「開催記念講演会」(2018年11月1日)

*「漢字文化圏における文字と造本」(同11月3日)

*「和様刊本の諸相」(同11月4日)

*「和様刊本の美を探るⅠ」(同11月16日)

*「和様刊本の美を探るⅡ」(同11月17日)

*「和様刊本の美を探るⅢ」(同11月17日)

また、城端別院善徳寺からの依頼で、新島教授による講演が行われた(*⑬)。講演は城端別院善徳寺にて開かれた同寺の「文化財護持の会」による臨時総会に合わせて行なわれ、天文版「三帖色紙和讃」を中心に同寺の持つ宝物の意義について講演した。

<優れた成果が上がった点>

和様刊本の源流域には、漢字平仮名交じり文と漢字片仮名交じり文の二つの流れが存在する。民藝運動を主導した柳宗悦の著書『蒐集物語』には、浄土真宗の漢字片仮名交じり文の刊本の源流域に対する指摘があり、幸いにも駒場の日本民藝館にてそれらの書物を調査することができた。それが、蓮如上人により文明五年(1473年)に開版されたいわゆる文明版『三帖和讃』であるが、この書物には龍谷大学や大谷大学などに諸本が存在する。どれを最古版とするべきか、書誌学的な結論を得るには至っていないが、今回は偶然にも、その源流に限りなく近いと考えられる、石川県金沢市の本泉寺が所蔵する文明版『三帖和讃』に出会うことができた。今後、専門家による判断が待たれる。同様に、漢字平仮名交じり文の源流に、浄土宗の『黒谷上人語燈録』(1321年)が存在することを、やはり『蒐集物語』からの指摘で迎えることができた。これは龍谷大学図書館で実見することができた。

これらの浄土教の書物が重要なのは、その和様の造本美と浄土真宗の片仮名の美しさにもよるが、共に開版の意図が「普通の人々の為に分かり易く」伝達することにあり、デザインに携わる者の目的に重なるとの理由が大きい。とりわけ、浄土真宗の刊本では、字・語・句の間に記された小さな赤い円の代わりに小さな空きを作ることにより、日本語の表記を一新させた点にきわめて重要な意義がある。また、この「文明版」の文字形象を引き継いだ天文版『三帖色紙和讃』(1553年)は、さらに色紙に摺られており、その造本美は類を見ない。

本研究では、「和語表記による和様刊本の源流」を辿る調査の結果、漢字仮名交じり文の源流を代表する二冊の書物を日本の造本史に明確に位置付けることができた点に、大きな成果を得ることができた。

<課題となった点>

・デザイン学的知見をもとに始まった研究だが、デザイン以外の美術全般に、この研究の成果が波及することが望まれる。

・復元の過程で得られた新たな知見を、今後どのようにして次世代に伝えていくか、教育カリキュラムへの組み込みが課題となる。

・復元を行なうことにより、木版印刷の持つ可能性を広げることができた。今後、このような伝統的技術を現代に活かす手立てを探る必要がある。

・「古格」や「字力」といったこれまでの書体制作上では切り捨てられてきた概念は、現代のデジタル技術により活かすことが可能となる。これからの書体制作、タイポグラフィ・デザインにどのようにして位置付けていくかが問われる。

<自己評価の実施結果と対応状況>

各年度末に行われる活動報告会や、通常行われる研究会、研究調査会議において自己評価を行った。

予算執行については、毎年度終了後、武蔵野美術大学監査チームによる学内監査を受け、検証と評価が行われた。

<外部(第三者)評価の実施結果と対応状況>

外部評価委員

樺山紘一(印刷博物館 館長)

小林健二(国文学研究資料館 副館長)

法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

白土慎太郎(日本民藝館 学芸員)

造形研究センター外部評価委員会を、2018年12月5日と2019年1月11日に開催した。
評価委員会における評価コメントを抜粋すると以下の通りである。

- ・本プロジェクトは重要な問題提起となると感じた。見落とされてきた木活字の美術史上の意義を認識された。従来の書誌学的アプローチではなく、造形学的観点からの取り組みが活きており評価できる。
- ・古活字、嵯峨本の復元に関心を持った。実際に復元に取り組んだことに意味があり評価できる。
- ・極めて限られた研究ジャンルでしか扱われなかった「和讃」や「御文」を、美術史学や書誌学で評価されてきた「嵯峨本」や「古活字版」と同じ組上に載せ「和語表記による和様刊本」と位置付けたことで、ジャンルを超えて総合的に捉えようとしたことに本研究の最大の特徴がある。

以上のコメントの通り、各評価委員より一定の評価が得られた。

<研究期間終了後の展望>

- ・『三帖和讃』と「嵯峨本謡本」の復元の過程で、多くのプロセス資料が残されている。それらを改めて成果としてまとめ、復元された資料とともに公開する展覧会を開催する予定である。
- ・これまでにない造形学的な研究方法により、多くの新たな知見が得られたが、結論が出ないまま課題として残った点も少なくない。今後、このような課題に継続して取り組み、次の研究に繋げていく努力が必要となる。
- ・本研究プロジェクトが開発した「古典籍の類似字形検索機能」と「古典籍の文字解析補助機能」のさらなる精度向上を図り、研究・教育の場で役立てていく。

<研究成果の副次的効果>

国文学研究資料館や野上記念法政大学能楽研究所など、専門分野を異にする機関との交流が促進され、これまでにない学際的な研究と関係の構築が可能となった。

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- (1) 木版印刷 (2) 古活字版 (3) 整版
 (4) 高速類似画像検索 (5) 漢字文化圏比較研究 (6) 嵯峨本謡本復元
 (7) 江戸版本文字形象研究 (8) 三帖和讃

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付すこと。

<雑誌論文>

1. 片塩二郎、板倉雅宣、内田明、大石薫、松尾篤史「江川次之進の事績と江川活版製造所の変遷」、『タイポグラフィ学会誌』7号 2014年、タイポグラフィ学会
2. 神作研一「An Outline of the History of Waka in the Edo Period 近世和歌史概説」、『国文学研究資料館紀要』40号 2014年、国文学研究資料館
3. 玉蟲敏子「やまと絵と琳派の交流」、『美術フォーラム 21』29号 2014年、醍醐書房
4. 杉浦康平、今村文彦、齊木崇人、山之内誠、黄國賓、さくまはな、長野真紀、曾和英子、松本美保子、尹聖喆、大田尚作「アジアのデザイン文化の比較研究/山車の造形と祭礼文化を中心に」、『芸術工学:神戸芸術工科大学紀要』2014~2015年、神戸芸術工科大学
5. 杉浦康平、黄國賓、赤崎正一、今村文彦、荒木優子、山之内誠、さくまはな、曾和英子「トンパ文字の構造原理とビジュアル・コミュニケーションデザインに関する研究」、『芸術工学』2014年、神戸芸術工

法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

科大学

6. 今岡謙太郎「明治期の黙阿弥作品に見る「世話物」の展開」、『日本文学』64(10)、2015年
7. 神作研一「(シンポジウム)江戸の〈知〉—蔵書の種々相を考える—」、『国文学研究資料館調査研究報告』35号 2015年、国文学研究資料館
8. 寺山祐策、赤崎正一、戸田ツトム、寺門孝之、小山明、黄國賓「近代デザイン全般の中でのエディトリアルデザインの成立に関する研究/杉浦康平デザイン研究の継承と展開」、『芸術工学:神戸芸術工科大学紀要』2015年、神戸芸術工科大学
9. 杉浦康平、谷口英理、伊村靖子、馬定延、長名大地「美術資料をめぐる回想 : 杉浦康平氏に聞く : 1960年代の東京画廊のカタログデザインを中心として」、『国立新美術館研究紀要』2016年
10. 荒俣宏「『絵』は、マルチメディアである。」、『Eunarasia Q = ゆーろ・ならじあ・きゅー』6、7、2016年、2017年
11. 玉蟲敏子「酒井抱一の俳賛をめぐる諸問題 : 「富士に帆掛舟図」と「正月飾り物図」を紹介しつつ」、『國華』122(11)、2017年
12. 荒俣宏「博物画の歴史と生物表現の進展」、『Biostory = ビオストーリー : 生き物文化誌 : 人と自然の新しい物語』28、2017年
13. 神作研一「江戸の〈和歌絵本〉」、『紫舟会会報』44、2017年
14. 杉浦康平、赤崎正一、黄國賓、入江経一、榮元正博、萩原小麻紀「杉浦康平のアジアンデザイン研究(ポスターと冊子を中心に)」、『芸術工学』2018年
15. 神作研一「調査収集のこれから」『調査研究報告』38、2018年
16. 片塩二郎、大石薫、日吉洋人、平野正一、古谷昌二「メディア・ルネサンス 平野富二生誕一七〇年祭『江戸・東京 活版さるく』」、『タイポグラフィ学会誌』11、2018年
17. 今岡謙太郎「黙阿弥初期の白浪物と「三人吉三廓初買」」、『日本文学』67(10)、2018年
18. 荒俣宏「人類普遍の図鑑を求めて」、『ユリイカ』50(14)、2018年

<図書>

1. 杉浦康平『文字の靈力』工作舎、2014年9月
2. 寺山祐策編集、荒俣宏特別監修『博物図譜とデジタルアーカイブ(特装本)』武蔵野美術大学造形研究センター、2014年10月
3. 玉蟲敏子、奥平俊六、並木誠士、中部義隆、河野元昭『年譜でたどる琳派 400年』淡交社、2015年1月
4. 荒俣宏『サイエンス異人伝 : 科学が残した「夢の痕跡」』講談社、2015年3月
5. 本庄美千代編『江戸のしかけ絵本 : 立版古とおもちゃ絵』グラフィック社、2015年9月
6. 玉蟲敏子、赤沼多佳、内田篤呉『もっと知りたい本阿弥光悦 : 生涯と作品』東京美術、2015年9月
7. 玉蟲敏子「書画二重奏への道」(『光悦琳派の創始者:光悦村開村 400年記念論集』所収、宮帯出版社、2015年10月)
8. 荒俣宏『脳内異界美術誌 : 幻想と真相のはざま』KADOKAWA、2016年2月
9. 今岡謙太郎「勸善懲惡視槐機」解題(『正本写合巻集』17)日本芸術文化振興会、2016年3月
10. 玉蟲敏子『日本美術のことばと絵』KADOKAWA、2016年5月
11. 神作研一、落合博志、恋田知子『書物で見る日本古典文学史』(図録)国文学研究資料館、2016年6月
12. 新島実、アラン・チャン、えぐちりか、保田卓也『グラフィックトリアル 2016—Crossing—』印刷博物館、2016年6月
13. 玉蟲敏子『日本美術のことばと絵』KADOKAWA、2016年5月
14. 玉蟲敏子『酒井抱一 : 大江戸にあそぶ美の文人』山川出版社、2018年6月
15. タイモン・スクリーチ『Obtaining Images: Art, Production and Display in Edo Japan』Reaktion Books、2017年2月
16. タイモン・スクリーチ; 森下正昭訳『江戸の大普請 : 徳川都市計画の詩学』講談社、2017年9月
17. 本庄美千代「しかけ絵本の世界 : 七〇〇年の歴史をたどる」(『別冊太陽 : 日本のこころ』所収)2018年
18. 新島実、寺山祐策監修『和語表記による和様刊本の源流 : 武蔵野美術大学造形研究センター日本近世における文字印刷文化の総合的研究』(論考篇・図版篇)武蔵野美術大学造形研究センター、2018年11月(*②)

法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

<学会発表>

1. 神作研一「江戸の写本文化」(University of California, Workshop on Japanese Old and Rare Books) 2016年3月11日
2. 玉蟲敏子「かざりと装飾 —日本美術からのアプローチ—」(藝術学関連学会連合 第12回公開シンポジウム:21世紀、いま新たに装飾について考える) 2017年6月10日
3. 神作研一「<和歌絵本>の諸問題」(ダブリン国際シンポジウム 2017)2017年

<研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等

<既に実施しているもの>

1. 展覧会「和語表記による和様刊本の源流」(2018年11月1日～12月18日)を開催し、研究成果を公開(*①)
2. 新島実、寺山祐策監修 展覧会図録『和語表記による和様刊本の源流：武蔵野美術大学造形研究センター日本近世における文字印刷文化の総合的研究』(論考篇・図版篇)(武蔵野美術大学造形研究センター、2018年11月)を刊行し、書籍のかたちで成果を公開(*②)
3. 展覧会開催記念特別対談「江戸の出版」
ロバート キャンベル(国文学研究資料館館長)×神作研一(国文学研究資料館教授、造形研究センター客員研究員) 2018年11月1日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
4. 展覧会開催記念講演「和語表記による和様刊本の源流」
新島実(本学視覚伝達デザイン学科教授、本学造形研究センター研究代表者)
2018年11月1日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
5. 講演会「心手合一：タイポグラフィの東洋的手法」蔣華(中央美術学院副教授/中国)
2018年11月3日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
6. 講演会「刊本の版下本の書写者と朝鮮時代の木活字印刷について」南權熙(慶北大学校教授/韓国)
2018年11月3日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
7. 講演会「近代ハングル活字の変遷と流通」朴志勲(朴志勲デザイン事務所代表)
2018年11月3日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
8. 講演会「和様刊本の源流」寺山祐策(本学視覚伝達デザイン学科教授、造形研究センター研究員)
2018年11月4日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
9. 講演会「謡本出版史の中の光悦謡本」宮本圭造(野上記念法政大学能楽研究所教授)
2018年11月4日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
10. 講演会「光悦謡本の美—俵屋絵との接点をさぐる」玉蟲敏子(本学造形文化・美学美術史教授、造形研究センター研究員) 2018年11月4日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
11. 講演会「古文眞寶を巡って」林望(作家、書誌学者)
2018年11月4日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
12. 講演会「漢字文化の受容と刊本字様・活字書体の変遷」片塩二郎(活字研究者、造形研究センター客員研究員) 2018年11月4日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
13. 対談「写本から古活字、その復元」新島実、寺山祐策
2018年11月16日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
14. 講演会「近世日本における刊本のデジタル化と印刷表現について」工藤哲彦(フォトディレクター、凸版印刷株式会社)、田中一也(プリンティングディレクター、凸版印刷株式会社)
2018年11月16日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
15. 講演会「類似画像検索システム「EnraEnra」」廣池敦(株式会社日立製作所研究開発グループ)
2018年11月16日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
16. 実演「摺り」嘉戸浩(「かみ添」主宰、唐紙師)
2018年11月17日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
17. 実演「彫り・摺り」竹中健司(有限会社竹笹堂代表取締役、摺師)、野嶋一生(有限会社竹笹堂、彫師)
2018年11月17日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)

法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

18. 実演「綴じ」大入達男(株式会社大入代表取締役、文化財修復師)
2018年11月17日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
19. 講演「嵯峨本復元プロジェクト」新島実
2018年11月17日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
20. 講演「嵯峨本復元プロジェクト 彫り、摺り」竹中健司
2018年11月17日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
21. 講演「嵯峨本復元プロジェクト 料紙、綴じ」大入達男
2018年11月17日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
22. 講演「角倉一族」角倉吾郎(角倉宗家17代当主)
2018年11月17日 武蔵野美術大学 美術館ホール (*⑤)
23. 講演「和語表記による和様刊本の源流」新島実
2019年3月24日 城端別院善徳寺(富山県南砺市) (*⑬)

<インターネットでの公開>

武蔵野美術大学造形研究センターweb サイト <http://rcad.musabi.ac.jp/>
 日本近世における文字印刷文化の総合的研究プロジェクト web サイト
http://rcad.musabi.ac.jp/projects/modern_typography
 研究成果報告書 http://rcad.musabi.ac.jp/modern_typography/report/index.html
 「和語表記による和様刊本の源流」展 web サイト(*①)
<https://mauml.musabi.ac.jp/museum/events/12166/>

<これから実施する予定のもの>

2019 年度中に、復元した「嵯峨本謡本」と天文版『三帖色紙和讃』を公開する展覧会の開催を予定している。

14 その他の研究成果等

【研究会】

1. 廣池敦(日立中央研究所研究員)「日本近世における、文字印刷文化の総合的研究のための基礎調査」2014年9月20日 (*⑥)
2. 大入達男((株)大入代表取締役)「和装本の造本と綴じの技法実践」2014年9月26日(*⑦)
3. 廣池敦(日立中央研究所研究員)「高速類似画像検索システム「Enra Enra」について」2014年12月13日
4. 「光悦本 古活字本、日本の古典籍の研究閲覧」2015年1月19日
5. 石川英輔(『江戸期草双紙』を中心として文字および印刷文化について)2015年2月17日(*⑧)
6. 井上聡(東京大学史料編纂所助教)「日本近世における、文字印刷文化の総合的研究」インタビュー調査、2015年4月22日(*⑨)
7. 「日本の古活字本等の古典籍資料の熟覧」2015年5月22日 人間文化研究機構国立歴史民俗博物館
8. 趙健(北京・清華大学美術学院教授)日中韓共同研究「漢字文化圏タイポグラフィの変遷」・講演「中国におけるブックデザインの転換期1862年から1937年」2015年11月6日(*③)
9. 南権熙(東大邱・慶北大学社会科学大学教授)日中韓共同研究「漢字文化圏タイポグラフィの変遷」・講演「知識と情報コミュニケーションの側面から探る朝鮮半島の金属活字と木活字の歴史」2015年11月7日(*③)
10. 朴志勲氏(グラフィックデザイナー)日中韓共同研究「漢字文化圏タイポグラフィの変遷」・講演「近

法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

<p>代初期のハングル活字についての研究」2015年11月7日(*③)</p> <p>11. 神作研一「本にも身分がある—古典籍のカタチ—」2015年12月11日(*⑩)</p> <p>12. 新島実ほか『グラフィックトリアル 2016—Crossing—』(展覧会)印刷博物館、2016年6月11日～9月11日</p> <p>13. 宮本圭造(野上記念法政大学能楽研究所教授)「本阿弥光悦と謡曲 光悦流の筆写本と光悦謡本の関連について」2016年7月19日(*⑪)</p> <p>14. 「日中韓 共同研究会」2016年10月28日～30日(*④)</p> <p>15. 「研究資料熟覧会」2017年7月19日</p> <p>16. 「古文真寶特別研究会：国文学研究資料館との合同研究会」2017年9月8日(*⑫)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開会挨拶 ロバート キャンベル ・講演「江戸の古文真寶」神作研一 ・講演「江戸の版本の文字について—古文真寶のことなど—」林望 ・「古文真寶コレクション」縦覧 ・参加者全員によるディスカッション <p>17. 成澤麻子(静嘉堂文庫 主任司書)「江戸における図鑑の歴史」2017年9月29日</p> <p>18. 宍倉佐敏(宍倉ペーパー・ラボ代表)「古典籍・古文書の料紙について」2017年12月22日</p>
--

15 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項及び対応

<p><「選定時」に付された留意事項></p> <p>デジタル画像化、データベース化による資料整理が中心であり、総合化、多角化にどのような付加価値をもたらすのかわかりにくい。資料の活用に努めていただきたい。</p> <p><「選定時」に付された留意事項への対応></p> <p>古典籍画像のデジタル化、データベース化による資料整理に基づいて、資料の新たな利活用の可能性を広げるための研究とシステム開発に努めている。高速類似画像検索技術「Enra Enra」を応用して新たに開発しているシステム上に古典籍の文字データベースを構築し、これまで専門的知識が必要だった日本近世の版本の解読補助と文字解析に役立てようとしている。</p> <p>また、「嵯峨本謡本」の復元には、造形学的研究とともに、美術・デザインを始めとする各領域において、多様な専門性を有する研究員による多角的な検証が行われており、「嵯峨本謡本」研究の分野における新たな研究成果が期待されるだけでなく、これまであまり進んでいなかった近世木版印刷資料の学際的かつ総合的な研究の進展に寄与する可能性がある。</p> <p><「中間評価時」に付された留意事項></p> <p>該当なし</p> <p><「中間評価時」に付された留意事項への対応></p> <p>該当なし</p>
--

法人番号	131090
プロジェクト番号	S1411020

年度・区分	支出額	内 訳						備考
		法人負担	私学助成	共同研究機関負担	受託研究等	寄付金	その他()	
平成26年度	施設	0	0	0	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	
	設備	14,916	5,714	9,202	0	0	0	
	研究費	17,287	8,860	8,427	0	0	0	
平成27年度	施設	0	0	0	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	
	設備	10,314	3,702	6,612	0	0	0	
	研究費	28,484	14,865	13,619	0	0	0	
平成28年度	施設	0	0	0	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	
	設備	4,968	1,656	3,312	0	0	0	
	研究費	37,859	18,930	18,929	0	0	0	
平成29年度	施設	0	0	0	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	
	設備	0	0	0	0	0	0	
	研究費	29,251	14,742	14,509	0	0	0	
平成30年度	施設	0	0	0	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	
	設備	0	0	0	0	0	0	
	研究費	31,059	16,450	14,609	0	0	0	
総額	施設	0	0	0	0	0	0	0
	装置	0	0	0	0	0	0	0
	設備	30,198	11,072	19,126	0	0	0	0
	研究費	143,940	73,847	70,093	0	0	0	0
総計	174,138	84,919	89,219	0	0	0	0	

法人番号

131090

17

《施設》(私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。)(千円)

施設の名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
造形研究センター	H22	3,970㎡	20	18	—	—	—

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

0 m²

《装置・設備》(私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。)(千円)

装置・設備の名称	整備年度	型 番	台 数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究設備)							
古活字版嵯峨本『伊勢物語』	26	慶長13年再刊	上下巻1セット	2032 h	7,800	4,812	私学助成
草双紙を中心とする近世絵入本コレクション	26		21冊1セット	9682 h	5,475	3,378	私学助成
近世活字印刷資料コレクション	26		4冊1セット	2632 h	1,641	1,094	私学助成
整版丹緑本『曾我物語』	27	正保3年刊	12巻1セット	4320 h	5,346	3,300	私学助成
写本『千蟲譜』	27	文化8年頃刊	4巻1セット	1440 h	4,968	3,312	私学助成
写本『衆蟲写真譜』	28	幕末頃写	9巻1セット	1296 h	4,968	3,312	私学助成

18 研究費の支出状況 (千円)

年 度	平成 26 年度		積 算 内 訳	
小 科 目	支 出 額	主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消耗品費	66	事務用品	51	卷子スタンド、その他消耗品
		撮影用品	15	三脚、SDカード
光熱水費	0		0	
通信運搬費	85	資料送付	85	郵送代
印刷製本費	8	資料複写	8	資料複写代
旅費交通費	2,966	国内調査旅費	1,121	印刷資料調査(京都)
		外国調査旅費	1,845	印刷資料調査(韓国、中国)
報酬・委託料	0		0	研究会講師謝礼
修繕費	89	補修	89	研究資料補修費
支払手数料	8,824	資料デジタル化	6,576	研究資料デジタル化
		謝礼金	969	研究会講師謝礼、翻訳、通訳
		その他手数料	1,279	研究会記録用文字起こし、木版印刷手数料等
用品費	1,320	データ作成・編集	1,249	PC、外付けHDD
		撮影用品	71	ビデオカメラ
図書費	3,330	研究用図書	3,329	図書
計	16,688			
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	594	資料のスキャンと整理	594	時給870円、年間時間数683時間 実人数 7人
教育研究経費支出	0		0	
計	594			
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品	0		0	
図 書	0		0	
計	0			
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				

			法人番号	131090
リサーチ・アシスタント	0			
ポスト・ドクター	0			
研究支援推進経費	0			
計	0			

年 度	平成 27 年度			
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	428	文献資料	428	文献資料購入費
光 熱 水 費	0		0	
通 信 運 搬 費	0		0	
印 刷 製 本 費	67	広報	67	研究講演会ポスター・チラシ印刷費
旅 費 交 通 費	1,088	国内調査旅費	841	印刷資料調査(京都)
		外国人研究者招聘関係	247	日中韓共同研究会
報 酬・委 託 料	0		0	
支 払 手 数 料	13,683	システム開発	8,593	高速類似画像検索システム開発
		資料デジタル化	3,072	資料デジタル化
		その他	2,018	研究会講師謝礼、通訳、翻訳
用 品 費	503	撮影機材	45	デジタルカメラ、ライト、バッテリー
		編集機材	458	PC、ポータブルHDD
図 書 費	8,594	研究用図書	8,594	図書
計	24,363			
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人 件 費 支 出 (兼務職員)	1,300	資料のスキャンと整理	1,300	時給890(10月以降910)円、年間時間数1,445時間 実人数 3人
教 育 研 究 経 費 支 出 計	1,300			
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教 育 研 究 用 機 器 備 品	2,817	機器備品	2,817	ストレージ、デジタルカメラ
図 書				
計	2,817			
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	0			
ポスト・ドクター	0			
研究支援推進経費	0			
計	0			

年 度	平成 28 年度			
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	244	資料代	244	文献資料購入費
光 熱 水 費	0		0	
通 信 運 搬 費	3	資料送付	3	郵送料
印 刷 製 本 費	0			
旅 費 交 通 費	4,635	調査研究	4,635	調査研究に伴う旅費
賃 借 料	174	レンタルサーバ	174	レンタルサーバ、研究会用機材レンタル
報 酬・委 託 料	0		0	
支 払 手 数 料	24,571	システム開発、システム保守	12,950	高速類似画像検索システム開発・保守
		資料デジタル化	10,090	資料デジタル化
		その他	1,531	謝礼金、翻訳料、撮影費、他
用 品 費	154	撮影機材	78	デジタルビデオカメラ、デジタルマイクロスコープ
		保存用品	76	ポータブルHDD
図 書	7,630	研究用図書	7,630	図書
計	37,411			
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人 件 費 支 出 (兼務職員)	448		448	時給910(10月以降940)円、年間時間数489時間 実人数 3人
教 育 研 究 経 費 支 出 計	448			
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教 育 研 究 用 機 器 備 品	0		0	
図 書	0		0	

		法人番号		131090	
計	0				
研究スタッフ関係支出					
リサーチ・アシスタント	0				
ポスト・ドクター	0				
研究支援推進経費	0				
計	0				

年度	平成 29 年度				
小科目	支出額	積算内訳			
		主な用途	金額	主な内容	
教育研究経費支出					
消耗品費	36	資料代	36	文献資料購入費	
光熱水費	0		0		
通信運搬費	0		0		
印刷製本費	0				
旅費交通費	2,296	調査研究	2,296	調査研究に伴う旅費	
賃借料	6	レンタルサーバ	6	レンタルサーバ代	
報酬・委託料	0		0		
謝礼金	89	講師謝礼金	89	研究会講師への謝礼	
支払手数料	11,649	システム開発、システム保守	304	高速類似画像検索システム開発・保守	
		資料デジタル化	7,719	資料デジタル化	
		その他	3,626	謝礼金、翻訳料、撮影費、他	
用品費	12,167	撮影機材	179	デジタルカメラ	
		画像DB登録システム	11,988	ポータブルHDD	
図書	1,944	研究用図書	1,944	図書	
計	28,187				

アルバイト関係支出					
人件費支出 (兼務職員)	190		190	時給940(10月以降960)円、年間時間数201時間 実人数 2人	
教育研究経費支出					
計	190				
設備関係支出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)					
教育研究用機器備品	874	データ編集・登録	874	ノートPC3台	
図書	0		0		
計	874				

研究スタッフ関係支出					
リサーチ・アシスタント	0				
ポスト・ドクター	0				
研究支援推進経費	0				
計	0				

年度	平成 30 年度				
小科目	支出額	積算内訳			
		主な用途	金額	主な内容	
教育研究経費支出					
消耗品費	296	展示関係	296	パネル等展示用品	
光熱水費	0		0		
通信運搬費	0		0		
印刷製本費	282	展示関係	282	展示パネル印刷、ポスター	
旅費交通費	3,598	調査研究	3,598	調査研究旅費	
賃借料	106	レンタル	106	レンタルプリンター	
報酬・委託料	1,261	謝礼	1,261	研究資料翻訳料、通訳料、講師料	
支払手数料	22,432	システム保守	333	高速類似画像検索システム保守	
		資料デジタル化	13,504	資料デジタル化	
		その他	8,595	展示制作費、資料撮影費、ライセンス料	
用品費	3,084	システム、展示	3,084	高速類似画像検索システム、展示関連用品	
計	31,059				
アルバイト関係支出					
人件費支出 (兼務職員)	0		0		
教育研究経費支出					
計	0				
設備関係支出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)					

		法人番号		131090	
教育研究用機器備品	0		0		
図書	0		0		
計	0				
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出					
リサーチ・アシスタント	0				
ポスト・ドクター	0				
研究支援推進経費	0				
計	0				